

一、比叡山より吉水入室を最も重大な事件としているが、それに劣らぬ重要な事件は流罪赦免に当って帰洛しなかったことである。その理由いかに。

一、聖人は住所を大きく三度変えておられる。その意義。

一、在家生活に踏み切るには三十一才建仁三年四月五日の夢告が大きく聖人を動かしたと見るべきでなからうか。

一、この夢記で重要なことは「宿報」ということ、「女犯」ということ、「一生之間能莊嚴」ということであり、特に問題とすべきは観世音の誓願を己の使命と感得されたことである。

一、観世音と法華経。

一、教行信証に法華経が引用されないことと還相の世界。

一、法然、蓮如の教相に住相還相ということがないこと。

一、在家生活によって大経下巻を身説された。法然でも下巻を上巻の続きと読むのを親鸞は全く独自の訓点を施した。

一、大経に阿難段と弥勒段とある重要性。

阿難は仏在世の弟子の代表者。十七願ということは一応分っても信心の世界ということは開けなかった。

一、十八願因願の抑止門が下巻の成就文がそのままになっているのは阿難の了解によるからである。

一、「唯除五逆誹謗正法」とは釈尊のみが持っていた世界で仏在世の時唯一人知る弟子はいなかった。釈尊は弥勒を呼び出して大経を付嘱した。

一、善導も曇鸞もこのことを問題にしたが真義に至らなかった。釈

尊は二十年を経て出家した己の家に帰った。親鸞となって。

一、正像末和讃は弥勒に等しい信心の人の世界の讃歌である。

初期仏典にあらわれる「疑」の語について

桜 部 建

初期仏典の中で「疑」の意味に用いられた語は種々ある。(1) *vicicchā* は「分別理解する」意である動詞 *viceti* の希求相から生じた語であるから、おそらく、原義「弁別しようとする」から「さまざまに」考えないではいられない」「思い惑う」「疑惑する」の意となったものと思われる。(PTS 辞典は *'dis-reflection'* の意に解しているが同じ難く思う。)(2) *asaṅka*, *parisaṅka* は語根 *śank* から出ており、「案じ懼れる」「懸念する」「疑懼する」の意が強い。(3) *kaṅkha* は奇妙な語である。語根 *kaṅks* は、一般には、「……を望む」「……を欲する」「……であろうと期待する」の意に用いられ、「疑う」の意味に使われることは無いようである。ところが、仏典においては、稀に「……を欲する」の意に使うこともあるが、「疑う」の意味に用いられることが断然多い。「疑う」の義はあるいは「(は)つきり知っていないことをはつきり知ろう」と欲する」というところから出たのかも知れぬ (cf. D. II: 241) が、明確でない。(4) *vinatī* は名詞としてこの語形以外には、稀に過去受動分詞 *vinata* が見られるのみで、動詞 (*vinānati*) としては

用いられない。したがって、*vi-man*より生じた名詞形と見るよりも、むしろ名詞 *matu* に接頭辞 *vi-* を附したものと見るべく、その場合も、「*matu* (= *mind, opinion, thought*) を離れた」の意と解するよりもむしろ「種々な *matu* ある」の意と解すべきであり、なまじろに思い惑って考えが一つに決まらない状態をいう。(5) *kathakakatha* は文字通りには「*saying how*」であるから、「どうしようか、どうなんだろうか」と思い迷って明確にことを判断できない状態をいうのである。

このように色々の語が用いられ、それらはそれぞれのニ・アンスをもっているわけであるが、実際の用例では、各語のニ・アンスによって用いられた方が異っているというよりも、あまり区別無く、いずれもがほとんど同義語として通用されていると言ってよく、それらの中のいずれか二語あるいは三語を並べて挙げている場合も多いし、二つの語を結合して合成語となっている場合(たとえば *ka-ma-hivickicelin*) もある。もっとも、煩惱法の一として(すなわち三結・五下分結・五蓋・七睡眠などの一として)の、また心所法の一としての、疑は常に *vicikicchā* であって、他の語は用いない。

疑の対象になるのは、時には「如来の教法」であり、時には「仏・法・僧」、あるいはそれら三に「戒」または「道」を加えたものであり、時には「三世の法」であり、また時には三十二相の中の隠馬藏・広長舌の二相であったりする。

疑は「越え渡 *parati*」らるべきものである。また、「棄て *paṭi-hati*」らるべきもの、「除か *vineti*」らるべきもの「断た *chindati*」

るべきものである。

疑を離れるのは、如来の智慧なる光によってであり、仏(あるいは長老比丘)の説き明かしによってであり、正しく知ることによってである。

疑を離れた境地は「信解(勝解)した心 *adhimutta-citta*」「浄く明らかな心 *sampasannacitta*」であり、「動揺の無い *aneja*」「荒蕪の無い *akhila*」心であり、「覚知 *buddhi*」が増した状態である。

業とパロキヤル・ヒンドウイズム

佐々木 現 順

インド古典の研究は、その古典が一定の学派・宗派に限定せられているという事実によって、自ら研究範囲もまた限定せられている。インド全体を理解するためには、この限定を越えて現代社会に生かされているインド教の現実を理解せねばなるまい。

世界の新しい分野がこの方面に向って開かれつつあると考える。即ち、宗教社会学的研究方法と資料の収集とである。

この見通しの下で現代インドの宗教社会学の要求するものは、その地域的研究資料の収集を第一とする。さて、現代インドの宗教中、ヒンドウイズムの占める位置は最大であるが、それに対するインド人の生活態度は二つに分けられよう。